

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 23 日現在

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25380860

研究課題名(和文) 明示的/非明示的メッセージの顕在態度/潜在態度への説得効果に関する実験的研究

研究課題名(英文) Experimental research of persuasive effects of explicit/implicit message on explicit/implicit attitudes.

研究代表者

北村 英哉 (KITAMURA, HIDEYA)

関西大学・社会学部・教授

研究者番号：70234284

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：態度変化を促進する要因として明示的/非明示的なメッセージ、刺激の効果を検討する5つの研究を行った。これまで顕在的プロセスに偏った研究が行われてきた説得プロセスについて、暗黙裏に進行するプロセスの解明を目指して、非明示的あるいは閾下呈示の刺激を用意することでプロセスの進行に意識的思考が介在しなくても進むルートがあることをはっきりさせ、その進行プロセスに関わる刺激の呈示回数や強度などさまざまな要因を明らかにしていくことを目指した。5つの研究によって刺激強度を含めて禁止メッセージや画像の閾下呈示により喫煙や観光地選好の潜在態度は影響を受け得ることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：Five researches were done for investigating the effects of subliminal messages and images on attitude change. So far persuasion research attended to explicit processes, new research would be expected to clarify the implicit processes under consciousness through testing the effects of subliminal presentation. In the results, subliminal message or image including inhibition did have a significant effect on the implicit attitude. And the strength of the stimuli was also had a meaningful influence on the attitude of smoking and the preference of tour location measured by IAT.

研究分野：社会心理学

キーワード：潜在態度 説得的コミュニケーション IAT 画像呈示 閾下呈示 顕在態度 喫煙 言語処理

1. 研究開始当初の背景

説得的コミュニケーションと態度変化の研究について、顕在的な質問項目による簡単な態度測定だけではなく、近年活発に台頭してきた潜在測定の知見を取り入れることが研究の進展には有効であると考えられた。

説得プロセスにおいても、明示的なメッセージに基づく説得の他に、非明示的な方法による情報への反復接触、闕下呈示のような意識されない形での接触など多様な条件での検討が少ないのでそういった知見を実証的な実験によって増やしていくことは有意味である。また禁止メッセージが本当に有効であり、単純接触効果にもとづく親近感の醸成などの逆効果がないか検証が求められる。

2. 研究の目的

第1に、説得的コミュニケーションの独立変数側の要因として、明示呈示、非明示呈示、闕下呈示を検討する(研究1, 2, 3)。第2に、否定的な刺激呈示(実験1, 2)や否定文にもとづく禁止呼びかけなどのメッセージが有効なのかどうか検討する(研究3)。第3に、従属変数側の態度測定において、IATによる潜在測定を取り入れる(研究1, 2, 3)。

3. 研究の方法

共通の方法は、画像を中心とした説得につながる刺激呈示を明示、非明示、闕下などいくつかの条件で行い、説得効果を顕在態度尺度とIATによる潜在測定の両方を用いて測定し、比較検討を行った。

研究1では、禁煙について明示的にポジティブ(喫煙がカッコよく見える)画像とネガティブ画像を示し、その後の態度について顕在/潜在測定した。研究2では、上記を闕下呈示して検討した。研究3では、観光旅行の行き先として信州の画像を明示呈示、非明示呈示、闕下呈示を反復して行い、また闕下では、肯定文と否定文の両方の条件を用いて、単純接触効果がどのように絡んでくるかも検討できるようにした。

4. 研究成果

研究1 当時、世の注目度の高かったアニメ映画で喫煙シーンが多用されていることの是非が社会問題として議論された。映画の登場人物が格好よく喫煙しているシーン(ポジティブ画像条件とする)、汚れた肺や吸い殻などのネガティブ画像条件、画像を示さない統制群の3群を用意し、画像呈示群には明示的にプリントアウトした画像を示し、その後IAT測定を紙筆版で行った(喫煙 vs 運動)。

その結果、IATによる潜在測定では条件の効果が有意に見られ($F(2,27)=4.17, p<.03$)、

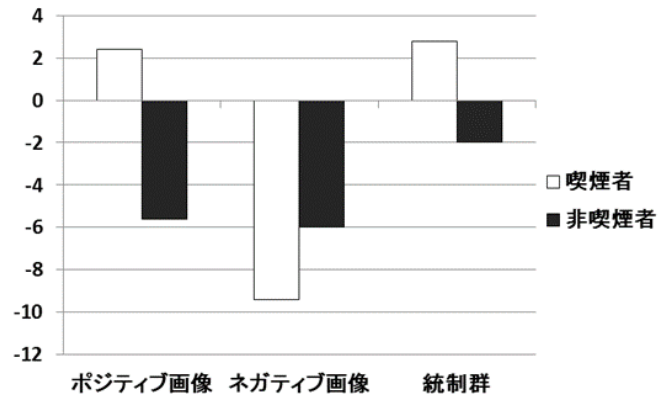


図1 IAT 紙筆版で測定した喫煙への好意性

喫煙者においてもネガティブ画像呈示は喫煙に対するネガティブな態度を引き起こすのに有効であることが示された一方、ポジティブな画像では非喫煙者はネガティブに受け取るが、喫煙者では統制群と比べて喫煙への潜在態度をよくも悪くも変化させなかった。

顕在態度測定では画像呈示は統制群に比べて有意な違いを生じさせなかった。効果は潜在態度により顕著に表れるものであり、潜在測定を取り入れた意義が示された。喫煙者が顕在的には反発、抵抗しながらも潜在的にはじわじわと否定的態度が醸成されていく可能性が窺えたと言えよう。

強いネガティブ画像などの刺激は恐怖喚起コミュニケーションの研究では顕在的には効果が薄いとされてきたが、潜在態度としては十分なネガティブ効果を生むことが新たな知見として得られた。

本成果は、日本社会心理学会第54回大会にて発表された。

研究2 45名の実験参加者に喫煙関連画像刺激をIATプログラムに挿入して、3回反復闕下呈示することによって行った(各20msec)。さらに恐怖喚起コミュニケーションに対する新たな知見を確認するために、ネガティブ画像を、強いネガティブ条件と弱いネガティブ条件の2条件に増やしてポジティブ条件とあわせて検討を行った。喫煙についての潜在態度はPCを用いて測定した。

その結果、条件の効果は有意であり($F(2,42)=11.83, p<.001, \omega^2=.312$)、さらに強いネガティブ条件は弱いネガティブ条件よりも有意に喫煙に対する潜在態度をネガティブとすることが示された。顕在態度ではこうした効果は観察されなかった。

本成果は、The Society for Personality and Social Psychologyの第15回大会(アメリカ、オースティン)において発表された。

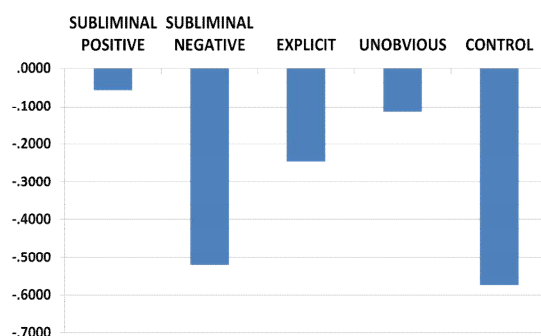
研究3 禁止メッセージの反復呈示がかえって単純接触効果を通してポジティブな親

近感を態度対象に対して生じさせないかどうかを検討した。そうした効果が生じたとしても倫理的に問題が生じないように刺激の主題として原発や廃棄場建設などではなく、よりニュートラルな観光地選択という設定で実験を行った。

予備調査に基づき比較的好意性、旅行への行きたさの程度が近い、信州（長野）と奈良を IAT のカテゴリとして設定した。説得誘導は信州に対して行った。

刺激呈示の実験条件は 4 条件を設けた。明示的呈示条件では、地域についての研究として旅行誌からコピーした信州の観光スポット、自然の風景などがきれいなほぼ画像を中心とするページを渡して見てもらった。非明示的呈示条件では、実験を実施する横の本棚に信州の観光地画像を 3 枚貼り付け、座席に座る前に目に入るような設置を行った。閾下呈示群では IAT プログラムのなかで 3 回画像を各 20msec 呈示した。閾下ポジティブ条件では画像呈示に先立って「信州に行く」という文言が呈示された。閾下ネガティブ条件では画像呈示に先立って「信州に行かない」という文言が呈示された。IAT は信州 v s 奈良についての好意性（ポジティブ、ネガティブ）の IAT と、観光地イメージとの結びつきを強められたかどうかの検討として、旅行 v s 学習のカテゴリと長野 v s 奈良の連合を検討する IAT を実施した。

長野関連語は、「りんご、信州、軽井沢、スキー場、野沢菜」、奈良関連語は、「鹿、鹿せんべい、大仏、法隆寺、奈良漬け」、ポジティブ語は、「幸せ、平和、喜び、楽しみ、友情」、ネガティブ語は、「失敗、拒否、不安、落胆、孤立」、旅行関連語は、「旅行、旅する、出かける、旅館、遊ぶ」、学習関連語は、「勉強、学ぶ、図書館、ノート、読書」であった。



64 名の関東地区（東京）の大学生を実験参加者としてデータを得た。好意性 IAT の D 値に対する分散分析の結果、条件の効果は有意であった ($F(4,58)=3.322, p<.02$)。多重比較の結果、閾下ポジティブ群と閾下ネガティブ群の間、また閾下ポジティブ群と統制群との間に 5% レベルでの有意差が見られた。このことにより、非意識的な情報処理システムにお

いても、肯定文と否定文の違いが認識され、文章の些細な違いによって潜在態度への閾下呈示効果に差が生じる結果が得られたことは注目に値するだろう。一方こうした閾下プライミングに対して顕在態度はあまり影響が見られないようであった。顕在態度の報告時には、意識的に以前の記憶や態度が考慮材料となり、刺激呈示の効果が打ち消されるような情報処理が加わるためであると推察される。観光地 v s 学習の IAT では、好意性のように効果は明確に得られなかった。刺激呈示によって瞬時に「観光地と言えば××」という結びつきを形成するには効果が弱かったと考えられる。これは、さらに反復呈示を重ねなければならないだろう。

呈示の条件としては、相対的に統制群と比べ、非明示的な呈示が好意性を高める効果を有する傾向が観察され、明示的な呈示は統制群との有意差が見られなかった。さりげない形での情報接触は、いくぶん有意な効果を有することが示唆された。

本成果は、The Society for Personality and Social Psychology の第 16 回大会（アメリカ、ロングビーチ）において発表された。

研究 4 画像による禁止メッセージが効果を有するか、また反復回数を条件として実験を行った。124 名の実験参加者が 3（刺激条件：呈示、禁止、警察）× 2（呈示回数：2 回、4 回）のいずれからの群に属し、呈示後放置自転車に関する顕在態度尺度に回答した。呈示群では近隣の放置自転車の様子の画像を閾下で単純呈示し、禁止群はその画像に大きく禁止マークを上書きした画像を呈示した。警察群では放置自転車の画像に引き続き警官、パトカーなどの画像閾下呈示が続く。顕在態度を従属変数として分析した結果、刺激条件の主効果は有意であり、単純呈示群は他の 2 群よりも禁止の態度が弱かった。反復回数の主効果、および交互作用は有意な効果が得られなかった。禁止情報を付加することは意味のある効果を態度にもたらし、この点は文章で行った研究 3 と整合し、閾下呈示であっても詳細な情報処理がなされていることがうかがえる結果となった。

研究 5 説得メッセージの非明示的效果はメッセージの内容そのものだけでなく、唱道者の特質が関与する。そこで唱道者の信頼性などの特性要因がいかにもメッセージから自動推測されるかを検討し、メッセージと独立に唱道者の社会的地位などで周辺情報を確立するのではない新たな取り組みを立ち上げた。

メッセージに用いられている言い回しや使用単語そのものからどの程度唱道者の特質が推測可能であるかをツイッターでの大量のメッセージを分析することで調べた。IBM の研究者と共同研究を行い、LIWC を用いて語をカテゴリに分類し、書き手 406 名の

5 因子特性質問紙への回答と合わせて、特性と語のカテゴリー語との頻度との相関を検討した。その結果、助詞・数詞を用いることと内向性、家族への言及と外向性、一人称使用と調和性などいくつかの有意な相関を見出すことができた。今後もカテゴリーの精度を精錬し、他尺度を用いるとともに尺度によらないでもいかに特性が機械による自動推測で判別可能か検討が必要である。

本成果は2016年3月に言語処理学会第22回年次大会において発表された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3件)

①下田 俊介、大久保 暢俊、小林 麻衣、佐藤 重隆、北村 英哉、日本語版 IPANAT 作成の試み、心理学研究、査読あり、85 巻、2014、294-303

DOI:http://doi.org/10.4992/jjpsy.85.1321

②小林 麻衣、清田 尚行、北村 英哉、存在論的恐怖が初対面の異性に対する関係希求反応に及ぼす影響：肉食・草食動物プライミングを加えた検討、東洋大学大学院紀要(社会学・社会福祉)、査読あり、50 巻、2014、55-69

③北村 英哉、社会的プライミング研究の歴史と現況：特性プライミング、目標プライミング、評価プライミング、感情プライミング、マインド・セット・プライミングの研究動向、認知科学、査読あり、20 巻、2013、293-306
DOI: http://doi.org/10.11225/jcss.20.293

〔学会発表〕(計 7件)

①山本 眞大、那須川 哲也、上條 浩一、北村 英哉、手作業翻訳の方針と半自動翻訳手法の提案、言語処理学会、2016年3月10日、東北大学(宮城)

②那須川 哲也、上條 浩一、山本 眞大、北村 英哉、日本語における筆者の性格推定のための言語的特徴の調査、言語処理学会、2016年3月10日、東北大学(宮城)

③ Hideya Kitamura、Evaluation of merchandise based on implicit affective states、The Society for Personality and Social Psychology、2016年1月29日、サンディエゴ(アメリカ)

④ Hideya Kitamura、Mai Kobayashi、Kunio Ishii、Shigetaka Sato、Kikue Oda、Mayuko Minato、Harada、Implicit persuasion: Effects of subliminal presentation of positive/negative sentences on explicit/implicit attitudes、The Society for Personality and Social Psychology、2015年2月26日、ロングビーチ(アメリカ)

⑤尾崎 由佳、Hofmann, W.、小林 麻衣、後藤 崇志、北村 英哉、野村 理朗、日常生活のセルフ・コントロールを探る：経験サンプリング法を通じて、日本心理学会、2014年9月12日、同志社大学(京都)

⑥ Hideya Kitamura、Implicit persuasion: Subliminal fear arousing effects on implicit attitude for smoking、The Society for Personality and Social Psychology、2014年2月15日、オースティン(アメリカ)

⑦北村 英哉、恐怖感機刺激、ポジティブ刺激が喫煙に対する潜在態度に及ぼす効果、日本社会心理学会、2013年11月3日、沖縄国際大学(沖縄)

〔図書〕(計 3件)

①北村英哉・内田由紀子(編)、ナカニシヤ出版、社会心理学概論、2016、350(88-101)

②下山 晴彦、遠藤 利彦、齋木 潤、大塚雄作、中村 知靖(編)、誠信書房、誠信心理学辞典・新版、2014、1088

③唐沢 かおり、野村 理朗、北村 英哉、堀毛 一也、浦 光博、山口 裕幸、村本 由紀子、沼崎 誠、北大路書房、新社会心理学：心と社会をつなぐ知の統合、2014、218(51-70)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

北村 英哉 (KITAMURA, Hideya)

関西大学・社会学部・教授

研究者番号：70234284

(3) 連携研究者

石井 国雄 (ISHII, Kunio)

清泉女学院大学・人間学部・講師

研究者番号：40705208